



蠟梅

真冬に妖精が放つ甘い香り



あべ 菜穂子

ように花をつけている。ほかに彩りのない真冬のロンドンの公園で、まるでその木だけに空から花の妖精が舞い降り、魔法の杖を振って周囲に光と香気を放っているかと思えた。

個々の花は、ロウ細工の

ようなつややかな淡い黄色の花びらの中に、紫色のものひとつの花弁を隠しもつ。この个性的な花木は、250年前にはるばる中国からやってきたのである。



時代(10〜13世紀)に、旧正月のころ満開になる稀有な花木としてもてはやされ、以後、長く栽培され、国民に愛されてきた。蠟梅の花の姿と香りは、中国にルーツを持つ人の祖国愛と感傷を喚起する。

花は、この世のものとは思えない、霊的ともいえる香りを天上から運ぶ(デイビッド・イー「中国の香気」より)

が評判になり、そこから各地の庭園や公園に広まっていった。世界にまたがるエンパイアを築いていた当時、人々は殺風景なこの国の冬に高貴な香りを運んだ花木を歓迎し、憧れと愛しさを込めて「ウインタースイート」と名づけた。



花の妖精たちは、東洋のかつての王国から海を越えてイギリスに到来し、帝国の灰色の冬空を静かな気分で彩ったのである。

イギリスに來たのは1766年。中部ウスター州の貴族コベントリー卿が手に入れて育てると、甘い香り

1月のある日、近くの公園に散歩に出かけると、思いがけず冷気をつけて甘やかな香りが漂ってきた。レモンと蜂蜜に、ちょっとシナモンのスパイスをきかせたような……。

芳香の元は、小道から少しはずれたところに立つ、高さ2.5ほどの「蠟梅」の木だった。裸の小枝に鈴の

もともと中国の「王朝の花」だった。文明の中心地として繁栄していた宋王朝

イギリスに來たのは1766年。中部ウスター州の貴族コベントリー卿が手に入れて育てると、甘い香り